

土木技術者にとってのIT

《前編》

いま、土木技術者として身につけるべきこと



世の中“IT、IT”って騒いでいるけれど、
この流れを土木技術者はどうとらえるべきなのか？
今回、土木学会 土木情報システム委員会 情報共有技術小委員会の協力を得て、
2回にわたる座談会を開催し、土木技術者にとってのITを考える。

出席者（順不同） (司会) 戸田建設株式会社企画室情報課 佐藤 郁
 武蔵工業大学工学部土木工学科助教授 皆川 勝
 西松建設株式会社企画技術部企画技術課係長 古村文平
 株式会社建設技術研究所 東京支社河川本部・技術第五部次長 伊藤一正
 日本工営株式会社事業開発本部課長 小松 淳
 株式会社オリエンタルコンサルタンツ 社長企画室情報企画チーム技術主査 中村真一
 株式会社横河技術情報 情報開発部課長補佐 浪川良春
 東日本旅客鉄道株式会社東京工事事務所工事管理室副課長システムグループリーダー 小林三昭
 東京電力株式会社建設部土木・建築技術センター積算・情報技術グループ副主任 宮田 卓

■まずは困ったことから

佐藤◎本日お集まりいただいた皆さんは、大学、発注者、ゼネコン、コンサルタントというそれぞれ異なった立場で、情報技術の普及とか標準化、計画などに取り組んでおられます。そうしたなかで、実際にいろいろな問題とか失敗とか困っていることがあると思います。まずは、その辺の話からお聞きしたいと思います。古村さんの会社ではどうですか。

古村◎情報の共有・交換では、まず部署内のパソコンをLANでつないで、ファイル共有とデータ転送ができるようになりました。次に、社内のネットワークがつながり、インターネットにつながり、その間の動きがすごく早かったことと、情報交換のエリアが一気に広がったことで、それに伴うトラ

ブルというんですね、戸惑っている方が結構多かったなあ、あるいは現状でも多いなあという感じがしています。それは、データは送られてきたけれども、使っていないアプリケーションのデータであったり、圧縮されていたり…。データの扱い方がよくわからないので質問されたことがよくありましたね。

佐藤◎伊藤さんの会社では社内的にも組織化されて進められているとお聞きしていますが、その辺はどうですか。

伊藤◎当社は比較的早い時期から情報技術に着目してきました。このため、いわゆる情報の共有化を社内でするのかという課題に対して、かなりのお金と時間もかけてきました。初めころはメールを使うという人口はものすごく少なく、ほんの何人かだけの趣味の世界であったものが、ここ



佐藤 郁氏



小松 勝氏

2～3年であつという間に、北海道から沖縄に至るまで社内全部に行き渡って、ごく当たり前に情報交換ができるようになりました。これはものすごい財産になっています。社内には専門分野ごとのメ

ーリングリストができていて、普段、仕事をやる時に質問を投げかけると、早ければ30分、1日すると大量の情報が全国から集まって、それをすぐに使えるという環境があります。

佐藤◎理想に近いような形が実践できているようですが、そこに至る過程で何かトラブルはなかったですか。

伊藤◎いや、もう山ほどあったと思うのですが…(笑)。私のところの部門だけでも本当に腐るほどトラブルを繰り返してきました。実際には、社内の人間だけで対応できずに、コンピュータのメーカーさんとか、いろいろとところにお願いして仕組みをつくってってもらったというのがあります。本当に初めのころは、先ほど古村さんの話にもあったように、送られてきたメールが読めない。何だ、これはと。「太郎」で送ったらだめだよ。「ワード」でもう1回送って」とか、そういうことが日常茶飯事だったというのが実際ですね。

佐藤◎現在はそういう問題はなくなったのですか。

伊藤◎今は、特に使うソフトを統一しているわけではないのですが、かなりマナーがよくなってきた。ルールができてきたというか…。まあ、使えば使うほど慣れてきたのだらうと思うのですけれども。

佐藤◎小林さんの会社は発注者の立場で、今後ゼネコンや中小の業者を相手に情報交換していかねばならないと思うのですが、電子化という面の障害というか、現在何か抱えている問題はありますか。

小林◎現在、社内のネットワークが確立したところで、電子メール以外の社外との実際の電子データのやりとりというのはこれからの課題の一つです。特に受け側の環境が当社と同じではないので、その辺は今後もっと情報技術の普及が必要なのだという気がします。ただ、社内でもパソコンに不慣れな方がかなりいて最初は戸惑っていたようですが、実際に2年経ってみればもう電話と同じような使い方をしてくれているので、これからは特に情報技術とかシステムということを意識しないで、通常皆さんが使える世の中になるのだという期待は持っています。

佐藤◎小松さんは先進的に情報技術を活用した部署で活躍されていますが、将来というか、今後はどう改善されていく方向にあるのでしょうか。

小松◎実際にさまざまな情報機器

が世に出っていますが、とにかく初めてさわって5分以内に使えるというものにお目にかかったことがない。利用者にいろいろな教育を強いたり練習を強いたりする点で、情報技術というのは、まだまだとても未熟な世界です。その意味で、例えば現場にいる方が、これが使えなきゃというような恐怖心を抱いたりする必要はさらさらなくて、使えない技術を提供する方が悪いんだというくらいに思っていた方がいいような気がしますね。それで、本当に便利になるんだというのが実感できるようになるために、例えば1時間講習会を受ければとても時間がセーブできたりということがあるんだらやればいいんであって、これをやらなければ何ができないというような要らぬ不安を抱くことはないんじゃないかと思います。

佐藤◎割と自然に入っていけるような…。

小松◎電子メールにしても、ほとんど大多数の人が使っていて、一緒に仲間に入ると便利そうだなというようなとらえ方で十分だと思いますね。

■話の進め方が変わってしまった?

皆川◎メールを使うようになって便利になったというのは事実ですが、さらに話の進め方が変わってきましたね。例えば、何かディスカッションするときメーリングリストに流すと、情報が多数の人に共有されることになる。昔だったら、上司に相談してからとか、上司を通じて話を通すという手順を踏んでいましたから、情報を知っていることの意味が大きかった。つまり、情報を知らせないことによる操作がやりやすかった。それに対して、情報を知っていること自体の意味より、その情報に対してどう対応するかが大切になっています。どのようにそれを選別するかとか。

佐藤◎社内でメーリングリストをつくられている会社はありますか。

宮田◎社内システムじゃなくて、外部のASP(アプリケーションサービスプロバイダー)を使うようなやり方でもいいんですね。

佐藤◎ええ。いわば社内の情報交換の仕組みとしてメ



古村文平 氏

ーリングリストの類いを使っていれば。

宮田◎あります。

佐藤◎どういう活用のしかたですか。

宮田◎どこの会社でも、組織図上

のツリーの中だけで仕事をしているとは限りませんよね。個別のテーマに応じて、社外の人を含めたワーキングを結成して仕事をする人が多いですから、ワーキング単位でメーリングリストをつくって、情報共有をしなくてはならないという局面がよくあります。

浪川◎当社では、メーリングリストというよりもグループウェア、ロータス「ノーツ」を使っています。そういったものをどんどんつくっていった自由な発想を求めるような風潮が社内にあります。ただし、そういったものが今度は林立し過ぎてしまって、どこに何を発言していいのか、あるいは、何か困ったことに対して似たような分野がいっぱいできてしまったりしてというのはあるんですけども…。それでも、基本的には、オープンに発言すべき場を提供するのはいいことだということで。

佐藤◎それは非常に活発に運用されているわけですか。

浪川◎ある時期を区切れれば、最初すごく活発に運用されるのですが、物によっては自然消滅的に発言されなくなるものもあるみたいですね。

佐藤◎そういう活用というのは、下から上がってきたものですか、それとも上意下達的に命じられたものですか。

浪川◎両方あります。何か困ったことなどに対して、だれかが勝手につくって、そのうちみんなが集まっているというような、自然発生的なものが一つ。もう一つは、上の方から、こういった改革なり改善とか意見を出しなさいというようなものに対し、そこに入れていくような…。だから、二通りあるというのが実際ですね。

佐藤◎中村さんのところは、いかがですか。

中村◎私も、先ほど伊藤さんの紹介にありました、専門分野ごとのメーリングリストの立ち上げに挑戦をしたことはあります。新しいスタイルのコミュニケーションの問題というわけではないのですが、ホスト役をできる人の存在が重要だと痛感しました。どうしてもコミュニケーションが発散してしまい、何だ、こんな

程度のものかと誤解されるケースが多く、あまり継続したテーマは今までになかったですね。

古村◎メールは報告や連絡に使うのが主で、メーリングリストで議論をするというような使い方はほと

んどないと思います。メールを見ない人は相変わらず見ないという問題もまだ残っています。だから、メールというのはまた浸透してないのかなあという感じはありますけどね。

佐藤◎みんなが当たり前に使えるようになって初めてメールを通じた情報共有とか、議論が活発化してくるということですかね。

小松◎建設分野に限れば、全員が同じことを考えているというケースが非常に少なく、ある設計をやるといっても、ある現場のある地形の中にあるものをつくる時に出てきた問題というのは、本当に何十年か経って同じようなケースがあったというぐらい個別ですよ。ですから、どちらかというと盛り上がっていくメーリングリストの活用テーマというのはあんまりなくて、ある問題に対して個々に質問を投げかけて答えるというスタイルの問題解決が実際です。例えば、海外の現場から“問題があったのですが、どうしたらいいんですか”というメールで来て、これに対して半日以内に問題解決法を返答できるようになりました。時間と空間ということからいえば、相当近くになったといえます。

■メールが使えないと今後の仕事ができなくなる?

佐藤◎いま、メールの話に終始してきましたが、とりあえず土木技術者としてはメールは必須条件のようですね。メールが使えないと今後仕事ができなくなるぞという感覚はありますか。

伊藤◎そうですね。私もメーリングリストで社内の情報をやりとりするのと同じように、最近は発注者つまりお客さんの方からも、当たり前のようにメールで情報が入ってくる。情報が入ってくるというか、“いついつ打合せをやりましょう。この時間、丸をつけて送って”という感じでやりとりして、集まるメンバーにメールが流れていって、皆さんの調整がされて“じゃあ、この時間にしましょう”と。こういったことはほんの一例で、社外とのやりとりもごく当たり前にな



伊藤一正氏

ってきています。もはやメールが当たり前通信の方法として使われるようになってきています。そんなふうになってきたのは、おそらくここ1、2年の間じゃないかと思うんですね。

宮田◎メールというのは、電話のような気軽な通信の手段ですよ。だから、それはもう本当にベース中のベースで、まずメールを使ったコミュニケーションはだれでも当たり前のようにできなくちゃいけない。まあ、できますよね。簡単ですから。

皆川◎電話だと、その時間にそこにいなきゃいけないということがあるし、ファックスだったら流したものを再利用できないということもあるし、そういう意味ではやっぱりメールが便利ですね。

小松◎だけど、例えば施工現場の図面というのは、今の電子メールでは基本的に送れる大きさじゃないですね。だから、そのところで逆に皆さんが、特に建設会社の方はどう工夫しているのか、お伺いしたいですね。

古村◎大きな電子データをやりとりするんだったら、メールじゃなくて、やっぱりMOとか、CDに焼いたりとか、それで郵送ですよ。

皆川◎もっと緊急に見たいという場合にはどう対処してるんですか。

古村◎そのときは人が直接運んでいく。

皆川◎一番確実ではありますね(笑)。

佐藤◎図面も、図面集1冊の交換でなくて、1枚1枚の図面であれば、メールでも交換できそうに思うのですが、そうでもないですか。やはりファイル容量が大きいですか。

宮田◎例えばどこかの工事現場で穴を掘っていて、図面にない埋設物が出てきた。これをどうするか大至急決めるという場合には、図面の一部をコピーして、手で書き込んでファックスで送ってすぐに調整するというようなやり方を、通常はとりますね。

小松◎というより、それが一番効率がいいですよ、今の段階では。

宮田◎それを置きかえる情報技術というのは今のところないです。

中村◎ないともいい切れません。例えば、CADで図面の局所的な部分をスナップショットに撮って、それにちょっと手を加え、添付して送るといっ

たことを、簡単なツールで上手にやられている方もいらっしゃると思います。

皆川◎ただ、一般の現場の人が標準的に使うものとして認知されていけばいいんですけど…。なるべ

く多くの人が特殊な知識を持たずに利用できることが大切だと思います。

浪川◎最近、インターネットとかそういう情報技術を知っている人、知らない人の貧富の差じゃないですけども、ありますよね。だから、現在のところは、情報リテラシーという点は個人によるところが非常に大きいんじゃないかなあと思うんです。

小松◎それと、実際の事務所があって、コンピュータもデスクトップがあってという環境と、先ほどもたいに出動して埋設物どうこうというのをやっていると、移動の中でのある問題解決をするために何が一番いいかというのは、場面場面によって違うんだと思います。だから、いま、ユニバーサルに絶対に送れるものというので何かといたら、テキストだけのメールはひと通り、1000万台を突破したiモードまで含めて到達可能ですが、それ以外のものというのは、相手が何を持っているかということも考慮しないと、今のところできないですね。

宮田◎あるとすれば、来年からから世界に先駆けて日本に登場する次世代携帯電話、IMT-2000です。“現場でこんな埋設物が出てきました”という映像を送りながら、その場で対応を話し合うようなことができるかもしれませんね。

■普及させるための教育をどうするか

佐藤◎新しい技術は今後どんどん出てくると思うのですが、先ほどちょっとした工夫でファックスに代わるものもできるよという話もありました。リテラシーというか、そういうノウハウを普及させるための何か工夫というのはされていますでしょうか。あまねくエグゼクティブから現場の新入社員に至るまで、共通で使えるような、共通レベルのある基礎土台を社内に構築するというか、そういう工夫というのは何かありますか。

古村◎教育でしょうね、やるとしたら。

佐藤◎教育も、全国規模の会社も含め、小さいところも含め、なかなか集合教育って忙しいなかで難しいと

思うのですが、うまくやる工夫というのは…。

宮田◎一つは情報リテラシーの問題ということでよく片づけられてしまうんですが、もう一つはマナーやマインドの部分ですね。さっきの中村さんの話にもありましたけれど、“こういう送り方をした方が相手が情報が活用しやすい”とか、“こういう形式の方が受け取りやすい”という、受け手の立場に立って情報を発信することの大切さを教育の中に盛り込んでいくことではないでしょうか。

中村◎先ほど、画面のスナップショットで割と簡単にといてしまいましたが、意外と多くの前提条件というか、知識が必要になりますね。相手のグラフィックの環境がどうだとか、表示色がどうで画像ファイルのフォーマットがどうだとか、小さい範囲なのにやたらとデータサイズが大きくなっていて転送時間を浪費したりと、考えると切りがないくらい出てきますね。それだけ知識がいるということですよ。その辺に対して、教えてもらうとか、正確に学ぶということがなかなか難しいとも感じます。情報技術というのは圧倒的に海外から入ってきている。本質的な部分については、米国ではごく当たり前でマニュアルになっていない。国内のベンダーも米国の本社に追従するのが精一杯で、要求してもなかなか提供してもらえないといったところに、個人的にはすごくいらいらを感じてきました。

佐藤◎伊藤さんのところはどこされていますか。当然社内でもソフトはいろいろなバージョンがあったり、パソコンを買ってくると、一番新しいOSが入って、新しいソフトがあって閉口するのですが、その辺の統一化というか、コミュニケーションというか、ファイルとかやりとりするときによくいうような工夫というのは何かされていますか。

伊藤◎基本的には野放し状態です(笑)。まあ、やりとりして失敗して、だんだんみんなに覚えてもらっているというのが実際のところかなという気がしますけどね。新しい製品が出てきたら順次それを投入して、使えるような形にしていっているというのが実際です。

佐藤◎細かいトラブルの積み重ねで。逆にトラブルを恐れてはいけません。トラブルを蓄積しなければいけないということですね。

伊藤◎そうですね(笑)。

佐藤◎では、ホームページについてはいかがですか。
伊藤◎社内の基本としては、一応イントラネットに各部署のホームページがあるのですが、まずほとんどそっちは見ません(笑)。自分のスケジュール管理もできるようにになっているので、そこに自分のスケジュールを入れて、あるいは用事があるときは他人のスケジュールを見るというのが一番多いですけども。あと、社内の出納とかそういうのも全部それでやるんですが、伝達事項のようなものをホームページで見るということは、あまりないというのが実際ですね。

佐藤◎小松さんの会社ではそういう伝達事項とかはどうされていますか。

小松◎社内での事務部門が発信するような全社共通のものは1つのホームページになっていて、それ以外の技術的な発信というのはそれぞれのグループのメーリングリストという、やはりテーマに沿ったところというので使い分けというふうになっているんじゃないですかね。

佐藤◎全社へ向けた事務部門の通達のようなものは、皆さん、見てもらっているものですかね。

小松◎ちょっと詳しい話になりますが、ホームページを社内で作成するときのガイドラインというのがあって、各部門でページを作成するときには、社内の共通のホームページを1つのフレームの中に必ず入れなさいというのがあります。そうすると、各部門の所属員がその部門のホームページを見るときに、その窓の中に全社共通の話題が必ず出る。そういうウェブデザインのガイドラインを社内のデザイナーの人たちに普及させると、各部門の興味のあるところをやっばり一番最初見に行きますから、そこから全体が見えるというような感じですね。

佐藤◎なるほど。いわば社内のどこのホームページを開いても、伝えたいことは必ず載っているというようにつくってあると。それはなかなかおもしろい工夫ですね。

宮田◎当社の場合は、基本的に社員は全員、全社のイントラネットホームページというのを見なくちゃいけないんですが、それ以外にも各部門で個別に発信している情報がたくさんありますので、それを見落とさないように「私の朝一チェック」というのが最近できた



小松 淳氏



中村真一氏

んです。その人がアクセスできる範囲の情報で、あらかじめ指定しておくんですけど、自分に関係のある情報がもし更新されていると、通知してくれるような機能があるんですね。

佐藤◎やはり興味が湧いて見やすい環境をつくってあげるといことですね。

宮田◎そうですね。

小松◎福利厚生制度が変わったとか、自分の損得に関係するようなことは、必ず見た方がいい情報があるわけですね。現場の施工とかとちょっと離れてしまいますけれども(笑)。絶対に見た方が得というのがあると、そこは必ず見るようになります。

皆川◎授業で“BBSを使って書き込みをしろ”と言ったんですね。ところが、書き込みしないんですよ。それで、1回書き込んだら1点とか、要するに実利があるように仕向けました。ただ、何かずるいことをやっているような気がして、途中でやめました(笑)。ディスカッションすることによって自分が一番いい解にたどりつくとか、それをこちら側は評価するとかの工夫をすると、積極的に使ってくれるかもしれません。

佐藤◎企業としては割と情報技術の分野は若い人に頼っている部分も多いと思います。そういう中で、大学も含め、教育という面で新しく入ってくる新入社員なり学生なりに求める、ここまではちょっと勉強しなくて、こういうリテラシー、こういう概念を持っていてくれればいいのになあというものはありますか。ここまでのことはやっておいてくれるとありがたいんだけどなあという…。

浪川◎最近の新入社員は、メールを使ったり、ホームページを見たり、そういうのは結構たけている人が多いと感じています。逆に注意しておかないと、怪しみなどに勝手にホームページからわからないソフトとかをどんどんダウンロードしていて、ウイルスの危険等があるから、ちょっと心配な面もあります。

佐藤◎よく職務時間中に株をやったりとかいう問題が…(笑)。ほかの業界だと、余計なメールを打ったらクビにするとか、そういう話も聞きますけれども、そういうのというのはやはり対策していかな

ければいけないのでしょうか。

浪川◎当社ではログ(記録)はとっていますが、あまり細かくは規制していません。最近、情報系の雑誌を見ると、企業によっては厳しく制限するところもあるようで

すが…。あまり制限しちゃうと逆に仕事でインターネットで情報をとりたい人を制限してしまうということ。ただ、何かで発覚したら、対処をするようにしています。

佐藤◎その辺、小松さんのところは結構やられているのではないですか。

小松◎基本的に記録はとるけれども、コンサルタントという職種からいって、制限をかけないで活用を最大限にするという方を会社の方針としてはとっています。ただ、新入社員の教育のようなことでいえば、業務のために使うんですよということを確約してIDとパスワードを渡すとか、そういう約束事はしていますけどね。

佐藤◎初めの段階でくぎは刺しておきますよということですね(笑)。私の会社だと、学生が入ってきたときに「メールとインターネットは使えるか」って聞くと「使えます」と。「ワードとかエクセルは？」って聞くと、「いや、マックだったんでわかりません」というのはよく聞くんですが、そういう問題というのはありますか。「メール使えます」といっても「いや、ポケットボードです」とか(笑)、こういうのはどうでしょう。土木の分野だと、それ以外に、最近ですとCADが当たり前に使われてくる状況にはなってきていますが、例えばCADという面でいくと、やはり身につけておいてもらいたいものの一つになっているのでしょうか。いろんなソフトの違いとかありますけれども、どうでしょう。

宮田◎ワープロやメールなどの共通OAの研修をしたことがないので、ちょっとわからないんですけど、学校では別のメールソフトを使っていたとか、モバイルでしかメールをやったことがないとか、マックしか使ったことがないという人でも、それはそれでいいと思うんですよ。マイクロソフト製の固有アプリケーションが使えるかどうかよりも、む



浪川良春氏



小林三昭 氏

しろこういうツールを活用したビジネスのやり方がわかるかということだと思いますね。それが理解できる人には、たとえツールが違って、1時間、2時間教えてあげればわかることですから、むしろ

情報ツールを活用するセンスを身につけているかどうかを聞きたいですね。

佐藤◎いわば個別のソフトは教えればそれなりにわかるし、必要であれば自ら勉強するだろうと。

宮田◎研修の機会を設ければ、必ずできるようになりますから。

佐藤◎それ以上に、つくったデータを使ってどうするのかとか、もらったデータがどういうデータなのかとか、相手にスムーズに情報交換するにはどうしたらいいのかとか、そういうことがやはり大切だと。

宮田◎そうですね。報告書を作るのに切り貼りをして、その場はしのげるかもしれないけれど、後で使う人のことを考えたらどっちがいいのか、それを理解できるかどうかだと思いますね。

佐藤◎その辺というのは、社内の教育でできるものですか。それとも、やはり苦難を乗り越えて、トラブルの中で自ら身につけていってもらわなければいけないものですか。

宮田◎難しいですねえ。

古村◎そこのところはやりながらですよ。

佐藤◎やりながら身につけていく。

浪川◎私は、新入社員の情報リテラシーを上げるよりも、どちらかというと、社内のある程度年配の方に有効な活用方法などを教える方が難しいかなと思います。若い人はすぐ覚えますよね。

皆川◎これから数年で状況は大分変わってきますよね。高校までのカリキュラムが変わって、大学へ入る前に必修で情報をやってくることになる、大学がまず最初に変わらなければいけないんですけども、今の状態でそうやって入ってくる高校生が満足できるわけではない。メールを使えない先生がいたら、“何だ、この大学は？”って必ずなりますのでね。大学に入ってくる人の質はそういった形で情報に関して少し変わってくるんですが、それなのに“なぜ大学から出てくる人は依然としてこうなのか”と企業の方にいわれないようにしていかないと(笑)。

小松◎ただ、いま、就職活動自体がインターネットで

しか受け付けない会社が結構多いですから、その辺のベース、先ほどからいっているようなメールとホームページを見ますぐらいまでのところはほぼカバーされていて、先ほどのCADが使えた方がいい

とか、ワープロが使えたほうがいいかという話は、OJTじゃないですが、実際に担当するエリアで必要なアプリケーションを覚えていくという方が現実的なんだと思いますけどね。

古村◎個人個人の情報技術のレベル云々というよりも、それを使える環境であるとか仕組みがどうなっているかという方がずっと重要な問題だと思うんですが。

■正しい情報を見極める能力を身につけよう

佐藤◎今後会社に入ってくるような若い世代、もちろん今いる若い世代は、そうやって情報が使いこなせていると。一方で、今まで情報技術に触れてきていなかった世代がどうしても遅れがちだということですね。そういう人たちに、アプリケーションの使い方もわかりだけでも、情報技術を使ったビジネスのやり方はどういうものかを覚えて、その活用方法を知ってもらいたいということでしょうか。

宮田◎1ついうなら、情報選択能力ですね。

佐藤◎といいますと？

宮田◎今まで世の中は、情報を増やす方向にずっと動いてきたし、おそらく新入社員として入ってくる人たちも、情報を数多く集めることはできると思うんですよ。いろいろなメーリングリストへ入ったり、メールマガジンを読んだりすれば情報量は増えますし、検索エンジンを調べれば関連ページは大量に出てきます。ところが、あるテーマを仕事で取り組んでいて、それに関する情報を限られた時間でどうやって手に入れるかとなると、情報を絞り込んだり、いらぬ情報をそぎ落とすことが必要です。これだけ情報の洪水になってくると、むしろ集めた情報を思い切って「捨てる」能力が必要ではないかという気がします。

佐藤◎情報の洪水の中から正しい情報を見極める能力ですね。それはエグゼクティブにとって一番大切な能力なのかもしれませんね。社内から上がってきているいろいろな情報を見極めて方針を決める、そういう能力が、やはり情報ツールを使って必要になってくるの



宮田 卓 氏

ではないかということですね。

古村◎情報を集める点でいうと、インターネットの仕組みというのは、何げなくやっていますけれども、今までのことを考えるとすごく便利ですものね。

佐藤◎社会資本整備という分野で考えても、説明責任とか情報公開の方向に進んでいますからね。われわれの仕事にとっても有益な情報がどんどん得られやすいような状況になっていますね。

中村◎つまり、これからは正しい情報を見極める力が重要になるということですね。

小松◎まずは、コミュニケーションツールとしてのスキルは持ってくださいということ。それも、その現場に例えばファックスで送った方がいいのかというツールの選択能力を持ってください。その話がまずベースにあって、次に、情報を集めて自分の問題を解決しなさいといったときには、情報の集め方の中でどの能力が必要かといったら、情報選択能力ですよという、そういう感じなんだと思います。

浪川◎集める能力があって、さらにその中から選択する能力かなあと私は思います。情報をうまく集められない人もいると思います。

中村◎電話を使うにしても、電話を物理的に操作してかけるという使い方と、きちんとした言葉遣いで適切な応答をするという使い方があると思うんです。その両方が必要のように、コンピュータに関して、同じように要求されていると思います。その両方をきちんと教えられる人というのはまだ少ないのではと感じています。コンピュータを教えるというと、ワープロの使い方のオペレーション指導でしかないんですよ。本質的なテラシーを教えられる、情報技術に精通した人がまだまだ少ないのですかね。

教えるということに対して限界があるのかなあとも思うんです。自分が痛い思い、恥ずかしい失敗をして、その失敗を繰り返さないという経験の方が効果的のかなあと思っているんです。情報が氾濫しているなか、与えられた情報はあまり残らない。自らの貴重な経験のほうがと思っはいるのですが、いろいろと経験してみる時間がなくなっているのかなと感じています。

小林◎だって、電話の操作方法を教える人はいないですよ。それと同じですよ。

佐藤◎そういうレベルまで来ていると。

小林◎最小限使わなければいけないものは、本連載講座の第1回を読んでもらえればメニューがわかると(笑)。

中村◎電話の操作も転送や三者同時通話とか、ちょっと複雑な機能

は、意外に理解されてないですね。

宮田◎国際電話のダイヤルの仕方を聞く人もいますよね。

小林◎国際電話の知識のない人には、メールの方が楽なんですよ。

佐藤◎メールなら、たとえ地球の裏側でも同じ番号でいいですからね。最後に一つ、例えばそういう読み書きそろばん的なテラシーが自分は欠けているのでこのまま野に飛び出したらみんなに怒られる、恥ずかしい思いをするのが嫌だ。手っ取り早くそういうのを勉強したい、身につけたいと思った人はどうすればいいですか。

小松◎携帯電話を使うということですね。そういうことからいえば、電子メールなり、コミュニケーションの基本はこれでも十分わかりますんで。

佐藤◎携帯電話でもいいから、とにかく電子コミュニケーションの世界に、仕事とは離れてでも飛び込んでみる、友達とでもいいからやりとりしてみる、そういうことが必要だと。

中村◎そうですね。先ほど、何が正しい情報かというのが話題に出ましたけれども、正しいという判断は難しいですよ。たくさん選択肢、いろいろなものを見て、その中でこれが一番いいというものが正しいという結論になるわけですから、たくさん見ると何が正しいものを見つけられる一つの方法なのかなあと思うんです。いろいろな経験をして、それよりもあれが、あれよりもこれがいいという経験をした人が、知識を持った人になれるのかなあと思っています。

佐藤◎どうもありがとうございました。このつづきは、後編に。